

《プログラム》

ハイドン:弦楽四重奏曲 第79番ニ長調 Op.76-5「ラルゴ」(約18分)

ハイドン(1732～1809)が書いた弦楽四重奏曲のうち、1797年にエルデーディ伯爵の依頼で書いた6曲のセットは、「エルデーディ四重奏曲」と呼ばれ、ハイドンの最高傑作に数えられています。6曲のうち4曲に愛称がつけられ(第2曲「五度」、第3曲「皇帝」、第4曲「日の出」、第5曲「ラルゴ」)、よく演奏会に取り上げられています。

この作品75「エルデーディ四重奏曲」の第5曲にあたる第79番の愛称「ラルゴ」は、美しい第2楽章「ラルゴ」からつけられました。

第1楽章 アレグレット - アレグロ

3部形式。明るく屈託のない歌謡的な主題が展開します。

第2楽章 ラルゴ(カンタービレ・エ・メスト)

ソナタ形式。美しい旋律だがどこか物悲しい(mesto)楽章です。

第3楽章 メヌエット(アレグレット)

中間のトリオはチェロが活躍します。

第4楽章 フィナーレ(プレスト)

自由なソナタ形式。陽気な舞曲風のフィナーレ。

バルトーク:弦楽四重奏曲 第4番 Sz.91 (約24分)

ベーラ・バルトーク(1881～1945)は自国ハンガリーや東欧諸国の農民音楽を熱心に研究し、伝統的な音楽と、19世紀からの様々の作曲理念を取り入れた独自の音楽を書いて、20世紀の新しい地平を拓いた作曲家です。そしてシェーンベルクが確立させた十二音技法をさらに発展させた功績も有名です。「十二音技法」と聞くと難解なイメージを持てますが、アニメ「トムとジェリー」の追っかけっこの場面によく使われていて、実は僕たちはよく耳にしている音楽なのです。

彼の6曲の弦楽四重奏曲のうち、1928年に書かれたこの4番は最も無調的で演奏技術的に最も難曲とされていますが、最もよく演奏される曲でもあります。全部で5つの楽章からなるこの曲は、中央の第3楽章を中心に1と5、2と4の楽章が速度・拍子・形式の上で類似して(第1, 5楽章はソナタ形式、第2, 4楽章はスケルツォ)おり、全体としてシンメトリーな構成になっています。

第1楽章 アレグロ

自由なソナタ形式。三声の対位法による音楽。最後は力強く終わります。

第2楽章 プレスティッシモ、コン・ソルディーノ

4つの楽器が終始弱音を付けて演奏する「疾走する」音楽。グリッサンドが多用されます。

第3楽章 ノン・トロポ・レント

ほかの3つの楽器が夜の静けさをつくるなか、チェロがひとりモノローグします。やがてそれは他の楽器に次々と引き継がれたあと静かに終わります。

第4楽章 アレグレット・ピッチカート

4人ともが弓を置いてピッチカートで演奏します。ここでは「バルトーク・ピッチカート」と呼ばれる、弦が指板にパチン!と当たるように強く引っ張る奏法を作曲者が指定しています。

第5楽章 アレグロ・モルト

第1楽章とは対称的に力強く始まります。主題も第1楽章の変形したもの。荒々しいリズムの音楽。

ベートーヴェン:弦楽四重奏曲 第10番変ホ長調 Op.74「ハープ」(約30分)

ベートーヴェン(1770-1827)は16曲の弦楽四重奏曲を残していますが、それらは前期・中期・後期にくっきりと別れます。「ハープ」は「ラズモフスキー」の3曲と共に中期の作品にあたります。革新的で長大な「ラズモフスキー」のあと、「運命」「田園」などを作曲・初演した彼は、今度は短く簡素な構成の2曲(10番「ハープ」と11番「セリオーソ」)を書きました。

1809年に書かれた第10番「ハープ」は、二度寝から目覚めた朝のような、静かで柔らかい叙情を感じさせる作品です。第1楽章に嬉々としたピッチカートの掛け合いがあり、それがハープの響きに似ていることから、この曲の愛称がつけました。

第1楽章 ポコ・アダージョ - アレグロ

序奏付きのソナタ形式。荘重な序奏のあと晴れやかな主部に入ります。ピッチカートの掛け合いは低弦同士と高弦同士で演じられます。

第2楽章 アダージョ・マ・ノン・トロツポ

自由なロンド形式で少し変奏曲的。気品と繊細な美しさを持った楽章です。

第3楽章 プレスト

「運命」を思わせる動機(タタタターン)を持つ主題が、快活・奔放に展開されるハ短調で書かれたスケルツォ。切れ目なく次の楽章に続きます。

第4楽章 アレグレット・コン・ヴァリアツィオーニ

「さわやか晴れた空」を思わせる主題と6つの変奏曲からなる終楽章。最後のコードもさわやかです。